



燕石雜志

寫卷

15  
1492  
3



門 45  
號 1492  
卷 3

長石雜誌卷之三

江戸

義美軒

龍澤 解

瑣言述



鬼神餘論

鬼神の論いさぐさ盡さんゆへにこれに述ぶるを童叟のたむせし  
 疫鬼痘鬼といふものあり疫鬼ハ俗より疫病神痘鬼ハ俗より痘瘡神  
 あり和名鈔に瘧鬼邪鬼窮鬼ホを知り窮鬼ハ人の家より去るを  
 世に俗貧乏神といふは是なり和名鈔に瘧鬼邪鬼窮鬼ハ俗より去るを  
 項有子亡去而為疫鬼其一者居江水是為瘧鬼  
 和名衣也或於邪鬼日卒紀云邪鬼和名衣也或於邪鬼日卒紀云邪鬼  
 美乃加美或於邪鬼日卒紀云邪鬼和名衣也或於邪鬼日卒紀云邪鬼  
 窮鬼師説を藺とすりてこれ大陽の毒より一時の氣運に乗  
 流行と顛頂の子亡去る疫鬼とるものありの穢妄の疫癘ハを  
 癸として春夏の間最盛なりその寒く傷らるるの春夏大陽の毒小觸る

早稲田 大学 図書館  
35.2.1  
蔵 書

イナナ カニエ ヲカン ヲヨア オニマラヒ エマシノカニ ムル  
誘引つる故に私漢除夜に難くすめ疫鬼を驅つり我俗を疫か  
うーとの後述に災厄の厄と云るものハ怪しき唐山の立春の日土牛を遣  
まろく農度ををさむ 天朝亦これに倣ふて大寒の日夜半に陰陽寮  
土牛童子の像を造りて門に立遊喜式に土偶八十二枚 高各 土牛十二枚  
とつてえりその数一年十二箇月を表する故に土牛の青黄赤白黒を春夏秋冬  
冬東西南北の色に随ひてそれを多るとも亦水鏡文氏紀に慶雲二年とす  
あつて世の中ららりてとらふ人母ほりけり追儼といふはとまじり  
と見え亦慶雲一年天下疫癘盛みり人民多く失りて土牛をけり  
追儼といふは始りてと公彦根えりも記されたり吉田の疫塚にそれの餘  
は秋毎歳節分の夜吉田神祇官より庭上は塚を築くそれを疫塚  
といつてその塚 正月十九日に至りて餅去るを清祓といふ亦その小城四八幡  
の社頭は疫神をまつる亦その月十六日は伊勢國度會郡山田の御小獅子改

の神事あり亦二月十日高尾の法華會を女良比花といふとらふ者  
敷らとて寂蓮の誦するは 草堂の社頭におもむき是疫鬼を驅つるといふ  
穢に至る止るといふ夏越に七月に至る陽氣衰ふ故に秋にこれを穢  
王元が鬼ハ太陽の毒なりといふは疫鬼の毒なりといふは疫鬼也又形は但  
一時の氣運に随ひて流行するといふその形在るがとも陽衰るに至るに消  
然とて迹なき辟言ハ酒食の腐爛するといふ忽然とて 蠅の聚るに似たり  
人との酒飯を撤去するに蠅も又随ひて迹なきが如くして小蠅鳴也神とい  
をあらるる病劇しれ時人往く疫鬼をうつるありといふその疫とてその形  
状一定でどどもならぬ湯毒の毒の汗をうつるに似たりこれを山氣の蒸る  
雲霧を起さるに似たり 山中の人との雲の起るをえり勝騰乃り山中の人  
それをうつるに似たり奇峯を繕うが如く瘟疫の人と通る熱邪内を蒸してその  
毒外に散るとして患者との疫鬼をうつるに似たり 雲氣を瞻望し

是以奇峯と云るが如し人々の毒は醜ろと云ふ亦随く患む故に聖王天皇  
郡土を紀王に陰陽その時は乃ら乃らんとを禱し世俗春夏に疫癘し  
りく疫鬼を驅る驅るといふもさるるところ凡天より疫癘の流行り  
まきりて盡りてをりて天仲景氏を生じて永く疫鬼を驅る  
天朝 欽明天皇御宇に疫鬼大に起る弓削守屋大連その天災を  
疫鬼を追くりて又良茶を煮てとてんれりその身終に戮りて天  
檜の長幼一を守り乃ち方術を同郡の張伯祖に受傷寒論十卷を著し  
天朝の疫邪を退治り守屋ハ 天朝の大匠乃ち権を稱月馬子と争ふ  
遂に疫鬼をの攘りて亦是一時の氣運に係る歟その成敗は至るべき  
るところのやうに疫鬼も又疫鬼も同ト云ふを懼るる疫鬼より甚  
し世俗をの瘡の小児の疫なり直にこれを喰ひて疫人といはれり  
架一切の供物そのまは拜具しこれを祀るる最つしめり凡序熱りて  
祭る

至エフタカ オヨビ 郊外に送るこれ敬し遠るの意歟か毎戸にすめる隨  
疫鬼ののぼりてその處を治るが如し 往古に疫癘を患りては八九死  
り前後少なり餘の貴人疫癘よりを免ひて大境をえりて皆を  
續 日本紀天平七年閏十一月壬寅云是歲不稔自  
夏 至レ冬ニ 天下 患 疫 痘 癘 天 一 死 者 妻 子 疫 癘 の 夕 火 一 人 死  
乃らるるに後 醍醐 村上 山 融 の 御 宇 疫 癘 一 人 死 せ  
る 庶 民 至 る 一 人 一 死 後 三 條 の 皇 子 疫 癘 患 じ  
まじこの御面を蔽りてすくとまじりて此をすまじりて疫の癘ありて  
るに乃ちや一度患るなりかゆまじりて怪し實に一種の奇病なり天下  
の人民もゆりてこれを患るなりを怪し人も懼るる者病ありて  
とらん何事も恒とありて怪しなりと怪し酒とのせよとてこれを





禍を避んことを求むるは常より禱うべし病は甚しく禱る鬼神を

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

はかるべき時ありては鬼神の徳を以て禱ふべし鬼神の徳を以て禱ふ

敬問死曰。未だ知生焉。知死。論。世俗人の事ることをあはれむるべし

鬼の事んとし生をあらぶるべし。身没の苦樂をわらうのの惑ひ極まり子

貢問於孔子曰。死者有知乎。將無知乎。子曰。吾欲言

死之有知。將恐孝子順孫妨生以送死。吾欲言死之

無知。將恐不孝之子棄其親而不葬。賜不欲知死者

有知。與無知。非今之急。後自知之。孔子。聖人世のわらふべし

のの知と不知とを説くは亦不兼怪力乱神。祭如在。祭神

如在。神。孔子曰。吾不與祭。如不祭。論。聖人の鬼神を祭るは

祭を以てするべし。あはれむるべし。化人としてこれを畏らむるべし。祭

らざるが如し。とる世俗のあはれむるべし。祭祀祈禱のあはれむるべし。祭

し。これを祭るべし。とらんや事ると父母は事るべし。車はるべし。祭

祭るべし。とる世俗のあはれむるべし。祭祀祈禱のあはれむるべし。祭

祭るべし。とる世俗のあはれむるべし。祭祀祈禱のあはれむるべし。祭

祭るべし。とる世俗のあはれむるべし。祭祀祈禱のあはれむるべし。祭

祭るべし。とる世俗のあはれむるべし。祭祀祈禱のあはれむるべし。祭

祭るべし。とる世俗のあはれむるべし。祭祀祈禱のあはれむるべし。祭

祭るべし。とる世俗のあはれむるべし。祭祀祈禱のあはれむるべし。祭

祭るべし。とる世俗のあはれむるべし。祭祀祈禱のあはれむるべし。祭

皇例の隨筆は疱瘡神といふ唐書あり留青集は疱瘡神の  
社を建立する化縁の疏を載たりといふ私僕の俗習同病ありその取捨  
に至るの愚かあるありとす

(三) 蟬丸 附 園 東

蟬丸の子世のいふくはあり諸説を考ふるは天野信景の説を  
据とらん欽塩尻云覺一を明石檢校と稱する氏將軍の親族あり  
是より盲人咸ありといふあり城守が猿宿兩の敬  
天聽は達しく夜雨と勅号あり  
光孝天皇の皇子明を失ひありあり雨夜の此と稱するといふと帝  
紀を考ふる光孝二十六年より雨夜とすは皇の  
不げをあらやされりや光孝帝を小松の帝と稱は城守  
は後小松帝にあらやするをあらやする説をば

蟬丸を延喜帝第四の御子といふ類は  
近き弟は皇子の式部卿重明親王  
といふは近曾伊勢の名ありを圖したる草紙は  
引くは丸の唐の彈丸がを撰してその名を  
を載たり彼餘書考といふのいふもを考り  
欺はるるといふは其の説を考へて  
毒殺すといふといふ虚言の慢は聖賢を誣はる  
草紙物語ありは雅俗ともより根を言と  
偽書はるるの欺をその説を信用し又物も書  
吼ありといふ亦人を欺くの識を  
人のうへのいふと吾侪もある  
と蓋のいふと書は博く覽るるの善  
はるるといふ記



亦先達の鏡は蝉丸の盲人のあつどありうまうたが後撰集 そのの邊

坂の園のすの洞書は相坂の室は庵室をなくして住々 住々

えりといふ所の盲人のあつどありうまうたが後撰集 住々

あつどありうまうたの盲人の足音をすてふたが 今も圓居

てうへのあつどありうまうたの盲人のあつどあり 今も圓居

えりといふ所の盲人のあつどありうまうた 今も圓居

○附ての関東の逢坂の関より東をひいて坂東とす 東をひ

たつたれいものあつどありうまうた 今も圓居

らうほいありうまうたをさる博士のあつどあり 今も圓居

らうほいありうまうたをさる博士のあつどあり 今も圓居

らうほいありうまうたをさる博士のあつどあり 今も圓居

相坂の洞のあつどありうまうた 今も圓居

これ逢坂の関より東をひいて坂東とす 今も圓居

巻の五第二十は張りも入るなり亦同書 二條院の皇女前齋宮

内親 中道雅之位男 伊弉 よのひのあつどありうまうた

あつどありうまうたのあつどありうまうた 今も圓居

あつどありうまうたのあつどありうまうた 今も圓居

あつどありうまうたのあつどありうまうた 今も圓居

あつどありうまうたのあつどありうまうた 今も圓居

あつどありうまうたのあつどありうまうた 今も圓居

あつどありうまうたのあつどありうまうた 今も圓居

あつどありうまうたのあつどありうまうた 今も圓居

あつどありうまうたのあつどありうまうた 今も圓居

三 悪禪師

山東と稱せしむる 今も圓居

義久元年正月廿七日將軍實朝公右大臣拜賀とて、  
頼家の子石階のほつり、又定規のふたり、  
剣を抜て  
る夜、アサリ阿闍梨公曉頼家の子石階のほつり、イシノハシ又定規のふたり、ツルギ剣を抜て  
る夜、オホ公を犯し、クキヤウ世の人公曉を悪禪師とて、アクセンシ蟠龍子の俗談辨  
らんと糾し、クニ君又讐不可與共載、トモニ天公曉は出家人たり、  
以とも實朝の父の讐ありられ、サネトモ宋よとべんよとせ人悟り、サト世に  
憎之悪禪師をり、アクセンシその名は負り凡智の決新、ホニチ浮薄の至とて、イタ論理あり、ロニイロ似られども、ニハムその理を極むとて、アノイハナシ按じ、アノイハナシ東鑑云、アノイハナシ  
え久元年七月十八日、頼家於伊豆、ミユ彼善寺被害、カイセ于  
時年二十三、亦悪管抄、ククワシセウその名をたぐ、ヨシトキ時人より頼家  
を刺する、サなるを、ニチその喉を絞、シニヒ王陰囊を抜、キンダマこれを殺す、コロとあり  
ゆ、ヨリイハキヤウ頼家卿を殺す、シニヒその名をたぐ、ヨシトキ時人より頼家  
を刺する、サなるを、ニチその喉を絞、シニヒ王陰囊を抜、キンダマこれを殺す、コロとあり

公曉も亦父の讐をい、ウタころの強裸の中よ、カウキその極を、ニトその極を、オモキ  
る、ニカンミラス加稱建保元年夏五月、サネトモ實朝みより、ヨシモリ和田義盛、クニリヤク北條を討、オシモリ  
よ、ヨシイハ時より、サネトモ實朝をとり、ホウテウその名をたぐ、ヨシトキ時人より頼家  
を刺する、サなるを、ニチその喉を絞、シニヒ王陰囊を抜、キンダマこれを殺す、コロとあり  
ゆ、ヨリイハキヤウ頼家卿を殺す、シニヒその名をたぐ、ヨシトキ時人より頼家  
を刺する、サなるを、ニチその喉を絞、シニヒ王陰囊を抜、キンダマこれを殺す、コロとあり

る境の如く公曉の後時子孫は後時の家録に殺さるる事安んじし  
返るりの世の人徳をりく公曉をりく事ホラるる事

四 正儀義隆 休咏研

蟠龍子が俗院辨小楠正儀足利家へ降参りしといふ事  
阿蘇子に俗院辨小楠正儀足利家へ降参りしといふ事

あり操狂言の浄瑠璃本に正儀南帝を恨む事武家へ降参りし  
あり操狂言の浄瑠璃本に正儀南帝を恨む事武家へ降参りし

此は正儀の南朝を去る事満洲軍へ参りし事誓の誤り  
此は正儀の南朝を去る事満洲軍へ参りし事誓の誤り

細く要記梅雲記足利治乱記あり事梅雲記に依りて  
細く要記梅雲記足利治乱記あり事梅雲記に依りて

并深氏に取らりし故細く要記へ興福寺の真嚴僧正の記  
并深氏に取らりし故細く要記へ興福寺の真嚴僧正の記

建武元年正月止永弘二年十月興福寺金堂の什物あり  
建武元年正月止永弘二年十月興福寺金堂の什物あり

此は當時の實録なり即ち左方子母と聊考證と  
此は當時の實録なり即ち左方子母と聊考證と

應安二年 南方正平廿四年 正月南方 大将楠左馬頭

正儀種々謀ヲ獻ストイヘ氏 諸卿許容ナキ

以南方ヲウトンジ 京師へ降参スベキヨシ内

肉 相約スルノ由 風聞 此間畧マ

五月二日云云又ル 四月中旬楠正儀終ニ志

ヲ 變ジ入洛シテ新將軍ニ謁シ南方へ服従

セズ其子正勝同正元ホハ南方へ忠義ヲ存シ

父ト不和ナリ云云 和田和泉守マ夕南方へ忠

ヲ 盡シ正儀ト不和云云 此間亦畧マ

十二月上旬和田和泉守ト楠正儀ト不和既ニ

合戦ニ及ントス 此間亦畧マ

應安三年 南方改元建徳元年トス云云 十一月中旬南山ノ新

帝ノ勅ヲ受和田和泉守以下官軍數千人ヲ率

楠正俊が赤坂ノ城ヲ守卷テ攻ル同下旬和田

事ガ武威以ノ外楠ステニ敗北殆危シ以上細々要記

もろ末應安七年の比マサタケ和田正武楠正俊マサカツ正俊を攻

つゝもろ末應安七年の比ヨリユキ和田正武楠正俊マサカツ正俊を攻

つゝもろ末應安七年の比ヨリユキ和田正武楠正俊マサカツ正俊を攻

つゝもろ末應安七年の比ヨリユキ和田正武楠正俊マサカツ正俊を攻

つゝもろ末應安七年の比ヨリユキ和田正武楠正俊マサカツ正俊を攻

正平廿四年北京應安二年正月楠正俊武家へ下降系と告

同四月正俊ハ洛陽満ニ帰シ

建徳元年十一月南朝の猛士和田某私云是則和田泉守正武以下初ニ應ト

軍兵を引率し楠の要害を攻正俊武家へ降る故あり中畧楠正俊

南朝を背たり武家へ降るをいふもその一族ハ正俊正行ハ送訓を

聊もとむらぐらうマモ守り南帝ハ忠を勵んと欲するもの此未畧ス

文安四年十二月云云南朝官自殺楠二郎ホの勇士既ニ敵を若干討

捕遂ニ戦死シ以上松雲記

この後より細く要記あるとありとの楠二郎とありの楠が子孫

先が子孫たぐぬへ亦足利治礼記より

應安元年云云同二年正月二ハ將軍及満幼女

ナリトイヘ仁徳内ニ深キ故ニ南方ノ大敵楠

正儀等降参スベキ旨血書ヲ以テ依申細川右

馬頭頼之赤松判官等ヲ南方へ遣ス四月ノ壬

二ハ楠正儀ハ洛シテ先細川頼之ノ宅へ向テ

一禮シ則ニ献有テ其後頼之同道シテ將軍及

満公ノ御館ニ参礼等アリ龍尾ト云太刀ヲ正

後獻ス將軍甚秘藏セリ以上足利治乱記

わのどぐろんえたりあつるは蟠龍子といふは戯曲を引く正後が足利家

へ降し承りては絶つたを論じらるるはさるるの書にゆえん

をりるは千慮の一夫あるべし正後が足利家へ降りしと大塔宮の若宮陸

良親王の賀名生の奥銀嵩の親王に南帝を攻めんとす

十五二月十八日の千載のりよ人をてて室を切し明の譲聲漸が人の取

顔ハ天ユるれは由父子より肖なるのありは樹ハ人燃るれは由又よりあふん

しも相似とわれハ人作ハ天ユまされるといひて理より世俗の常

言は親よりいづるを鬼といふ人と鬼といふ相類は人從父子の氣相似

か耶の返鬼神論とあり考る

○脇左武部大補義治の嫡男相摸守義隆或は義隆は作るホウニヤウキヤウタオシテ

年四月廿五日相摸咽底倉より討死あり鎌倉大草紙より息刑部

少補ハ一所より居あり色ざり故相別をうそに討死ありと記せり

少彌と稱するものハた少彌義宗の嫡男貞朝臣のりをさうんせり

義隆といハ再後才の子息といふと同書は應永三年の書のり少若丸

一本大若丸は傳り非く奥列の住人庄司清包を称する右新田義宗義宗

新田相摸守その後弟刑部少補をりて大物といふ白河邊に打て出る

間上列武列より進居る官方の末葉悉く馳走りりりありこの刑部少彌

といふの何人ぞや非し後才と記し後才の子息といふ貞朝臣のりあり

少ぬりと少ぬり貞朝臣の刑部少補をりてありてこの人義宗朝臣の

嫡男より建徳二年より正五位下越後守天授二年より後四位下のた少ぬり

ありぬりて亦義隆の建徳二年より正五位下相摸守天授二年より後四位下陸

奥守右女御奥列四司子拜任せられぬり後義隆朝臣を鎌倉大草紙

後書記ある義隆は作る又浪合記は義則といふこの陸の字の刻に少ぬりあり

白石先生の記されし一冊のものをり義隆とありげし陸の字ハ人の名也  
 帝ハ池本ハミ降を陸は悟とありるべし  
貞方朝臣ハ應永十七年七月廿二日  
 千葉次郎兼胤於七里渡官也 亦録

倉大草紙又新田六郎多宗朝臣ハ子出家一兵部卿とて坂中と

以所ハ塾長ハひらるを勧めて還俗させ本名新田六郎とありて  
 館林

邊討て出陣中過半とてくわたり由良横瀬長尾但馬守持氏の地方と

一と十二月廿六日 應永正 岩一と合戦と云云と云ふ新田六郎のゆりをえど

尋ねたりされし持氏との叔父新御堂小路殿 満隆 并 舎弟持仲上叔禪秀

又ハ鎌倉君を追れ屢合戦一終ハ鎌倉へゆりありたりとのゆりも岩一と

治部大輔満純のゆりも人の禪秀の誓もありたり法名を天用と号し

實ハ義宗のゆりもありたり持國密ハ鎌倉とありといひ侍へたり

ハ新田六郎と満純とハ兄弟ありと云ふとの軍記ハ実録されど履漏不

しく考ふがたきなりはるを姑くとも抄く好古者流の考證を俟

千十三 南朝記ハ大徳寺の一休とゆえハ実ハ 後小松の皇太子

と云れどやハ腹と云ふりありありハ人臣の事とありて傍りありは

つゝあり 稱光院のゆりもありとて議せたりと定めたりと

と 院宣ありしハ私書言葉ありて一首の歌を献る

常盤本ハ本寺の梢の松の葉を拾ふとて  
タケ 木の園ハ見え

と云ふとて伏見殿のゆりもありとて語り流史餘論ハゆりを并して

とのゆりも一冊のゆりもせの宝と云ふとて語りゆりもゆりも

と云ふゆりもと記されたり南朝記ハゆりも時の冥録ハゆりもとて

ゆりもゆりもゆりもゆりもゆりもゆりもゆりもゆりもゆりも

ゆりもゆりもゆりもゆりもゆりもゆりもゆりもゆりもゆりも

五 八幡太寺

頼義朝臣の御子三人を帝をハ八幡宮の社壇とて之服せたりと云ふ

二郎ハ賀茂の神社 三郎ハ新羅の神社 四郎ハ服部 五郎ハ八幡  
六郎ハ賀茂 七郎ハ新羅 八郎ハ八幡 九郎ハ賀茂 十郎ハ新羅  
十一郎ハ賀茂 十二郎ハ新羅 十三郎ハ賀茂 十四郎ハ新羅  
十五郎ハ賀茂 十六郎ハ新羅 十七郎ハ賀茂 十八郎ハ新羅  
十九郎ハ賀茂 二十郎ハ新羅 二十一郎ハ賀茂 二十二郎ハ新羅  
二十三郎ハ賀茂 二十四郎ハ新羅 二十五郎ハ賀茂 二十六郎ハ新羅  
二十七郎ハ賀茂 二十八郎ハ新羅 二十九郎ハ賀茂 三十郎ハ新羅  
三十一郎ハ賀茂 三十二郎ハ新羅 三十三郎ハ賀茂 三十四郎ハ新羅  
三十五郎ハ賀茂 三十六郎ハ新羅 三十七郎ハ賀茂 三十八郎ハ新羅  
三十九郎ハ賀茂 四十郎ハ新羅 四十一郎ハ賀茂 四十二郎ハ新羅  
四十三郎ハ賀茂 四十四郎ハ新羅 四十五郎ハ賀茂 四十六郎ハ新羅  
四十七郎ハ賀茂 四十八郎ハ新羅 四十九郎ハ賀茂 五十郎ハ新羅  
五十一郎ハ賀茂 五十二郎ハ新羅 五十三郎ハ賀茂 五十四郎ハ新羅  
五十五郎ハ賀茂 五十六郎ハ新羅 五十七郎ハ賀茂 五十八郎ハ新羅  
五十九郎ハ賀茂 六十郎ハ新羅 六十一郎ハ賀茂 六十二郎ハ新羅  
六十三郎ハ賀茂 六十四郎ハ新羅 六十五郎ハ賀茂 六十六郎ハ新羅  
六十七郎ハ賀茂 六十八郎ハ新羅 六十九郎ハ賀茂 七十郎ハ新羅  
七十一郎ハ賀茂 七十二郎ハ新羅 七十三郎ハ賀茂 七十四郎ハ新羅  
七十五郎ハ賀茂 七十六郎ハ新羅 七十七郎ハ賀茂 七十八郎ハ新羅  
七十九郎ハ賀茂 八十郎ハ新羅 八十一郎ハ賀茂 八十二郎ハ新羅  
八十三郎ハ賀茂 八十四郎ハ新羅 八十五郎ハ賀茂 八十六郎ハ新羅  
八十七郎ハ賀茂 八十八郎ハ新羅 八十九郎ハ賀茂 九十郎ハ新羅  
九十一郎ハ賀茂 九十二郎ハ新羅 九十三郎ハ賀茂 九十四郎ハ新羅  
九十五郎ハ賀茂 九十六郎ハ新羅 九十七郎ハ賀茂 九十八郎ハ新羅  
九十九郎ハ賀茂 一百郎ハ新羅

その中ハ又内へ入りて度々あり 編纂のついでに目を合するものあり 自ら  
それを又八幡方郎と名づく云云とつりこれを陸奥流記に参考せしむ  
そのつり第六張云 同年 乃天喜 十一月。將軍率兵八  
百餘人 欲討負任等 負任等率精兵四千餘人 以金  
爲行 之河崎 柵爲營 拒戰 鳥海 干時 風雪甚 勵 道路  
艱 難 官軍無食 人馬共疲 賊類馳新羅之馬 敵疲足  
乏 軍非唯容主之勢異 又有寡衆之力 別官軍大敗  
死者數百人 乃一軍 長男義家 驍勇絶倫 騎射如神 冒  
矢 突重圍 死中必斃 雷奔風飛 神武命世 夷人靡  
走 敢無當者 夷人立一 曰 八幡 云云 今按 倭書 義家  
朝臣の武勇絶倫 乃東夷を威伏し 乃疑ふべし 乃負任亦その武  
勇を賞嘆し 乃八幡方郎と名づく 乃その稱あり 乃記者の記也

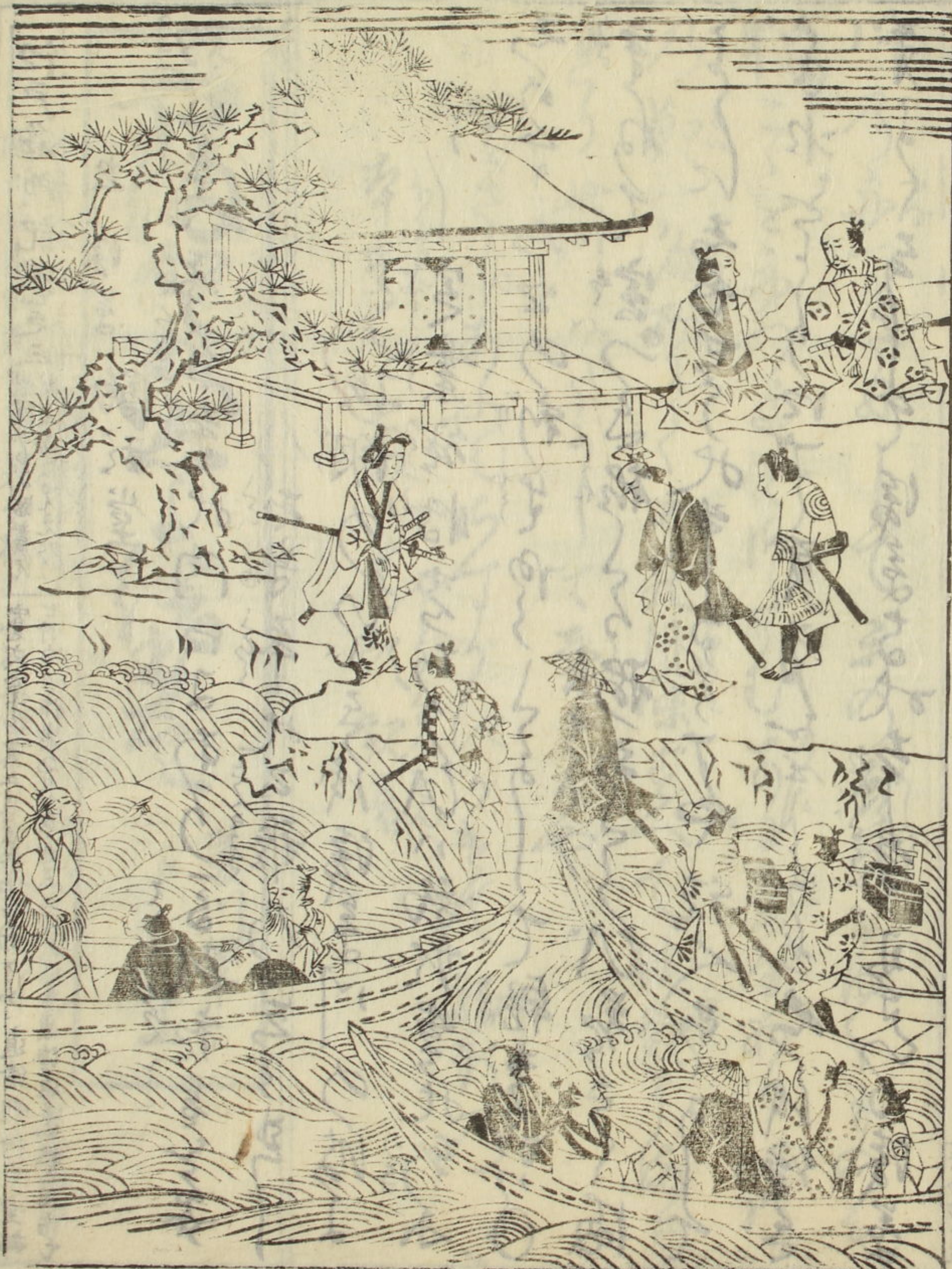
あるべし果一に如此なるんは賀茂二郎新羅之郎と稱する由亦列の  
縁故ありていりるに鎌倉管領三代記卷之四賀茂王丸之腹の辰は云持氏  
の嫡子賀茂王丸殿之後の沙汰あり今京都鎌倉確執の軍家にて  
頼むべしゆゆありと云れり八幡を康義家の佳例に任せんといふ鶴が  
岡の八幡宮に祀り賀茂王丸を實前より加冠せしめ義久と名付あひしを  
云云とあれば義家初八幡宮に神殿を建てて服をあらうりて世人八幡を  
郎と稱せり疑ふにや人の稱号をよほして牽強附會の說をあらは  
る事を知りて不承に田原の地を以て康と書し假字をあらはるを  
秀郷龍宮へ越すと云れども未の場をゆめを以てしりて世人儀を  
と稱するより平記よりえたり又紀實之論語より一以貫之といふ  
聖語をあらはるるにたゞは貫之らぬの名の實定といひて過る冠をゆり  
あらしめ此とこと教とて貫之と更なるる物なり定はる字はハ

从正之よりふよありんといふもとれらるるは抑て其は信と云ふ  
らんと史傳は銘文あり記録は訛謬あり況小説野史に至ると事多  
くは係らざるものなり今や古史の擗りたるはあり

(六) 浅草の事實

浅草の駒形堂は川のほとり正面よりその圖説江戸名所記大和名所  
濫ホよんえたり 濫出せ 船よりあるは便なりとありてその  
堂と題してあり此のさし川のほとり守追子の風帆をうつし  
松中より此堂をうつれば堂のうらるるやんゆるといふゆり堂と名づくといふ  
この説らるゆがと按じると當初の堂は浅草の親世音へおらると繪馬  
をうつしせんは建てる馬頭親音を安置したれば駒形堂と名づけたりと  
いふは駒形堂と唱へたる致されぬ戸名所記は駒形堂と記したれば  
留りし物たるを再按じると竹所の渡を昔の花方の渡といふこと





二  
 名所記駒形堂圖

卷之三第廿張



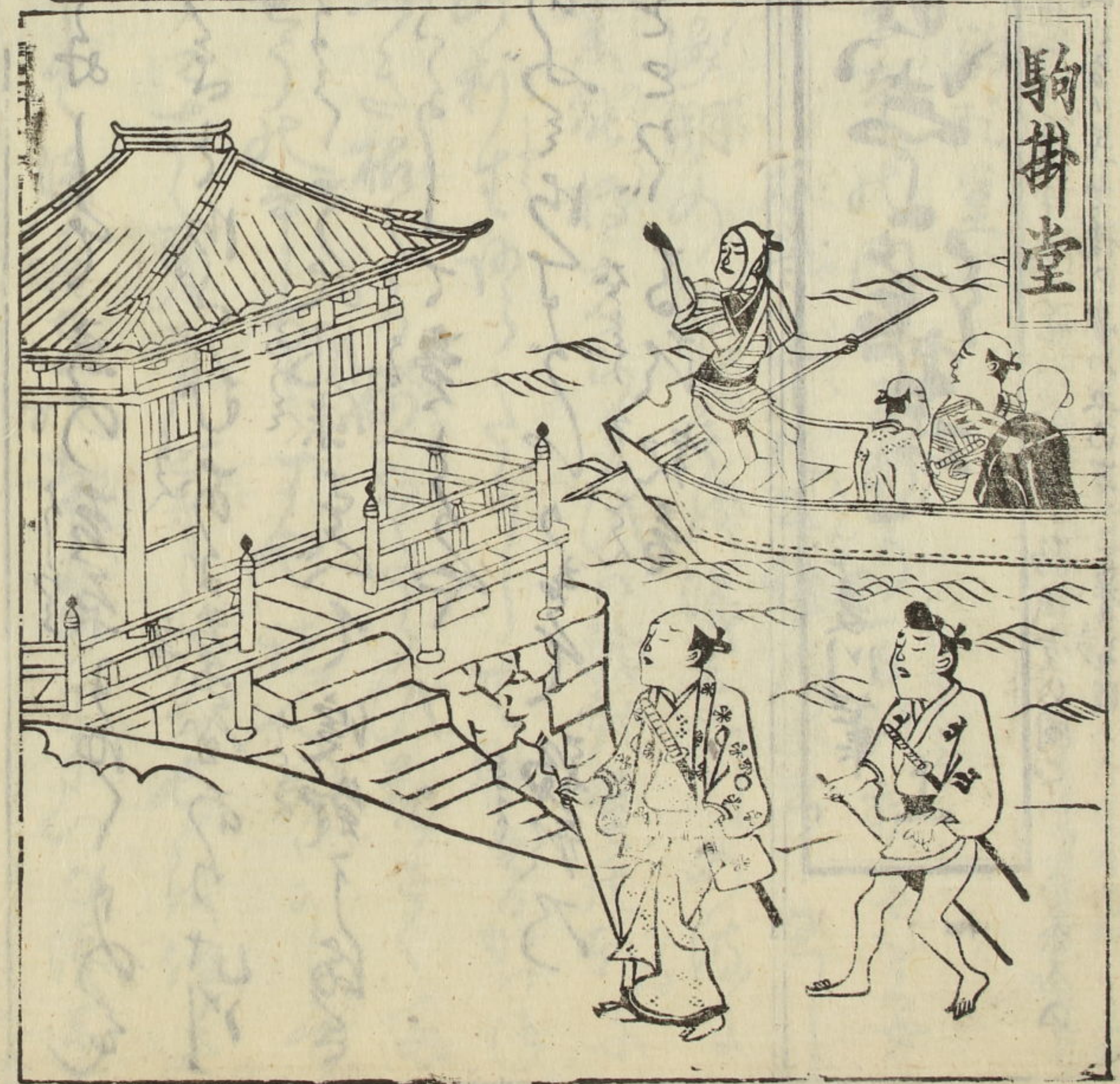
三



川  
 こころのなごみ  
 うきと下りて  
 つら山をわたる  
 りる路をみれば  
 おもひをよぶ  
 こころのなごみ  
 うきと下りて  
 つら山をわたる  
 りる路をみれば  
 おもひをよぶ

わささき言んえん  
 うきと下りて  
 つら山をわたる  
 りる路をみれば  
 おもひをよぶ

駒掛堂



大和名所濫上卷  
 十一張ヨリ  
 十二張迄

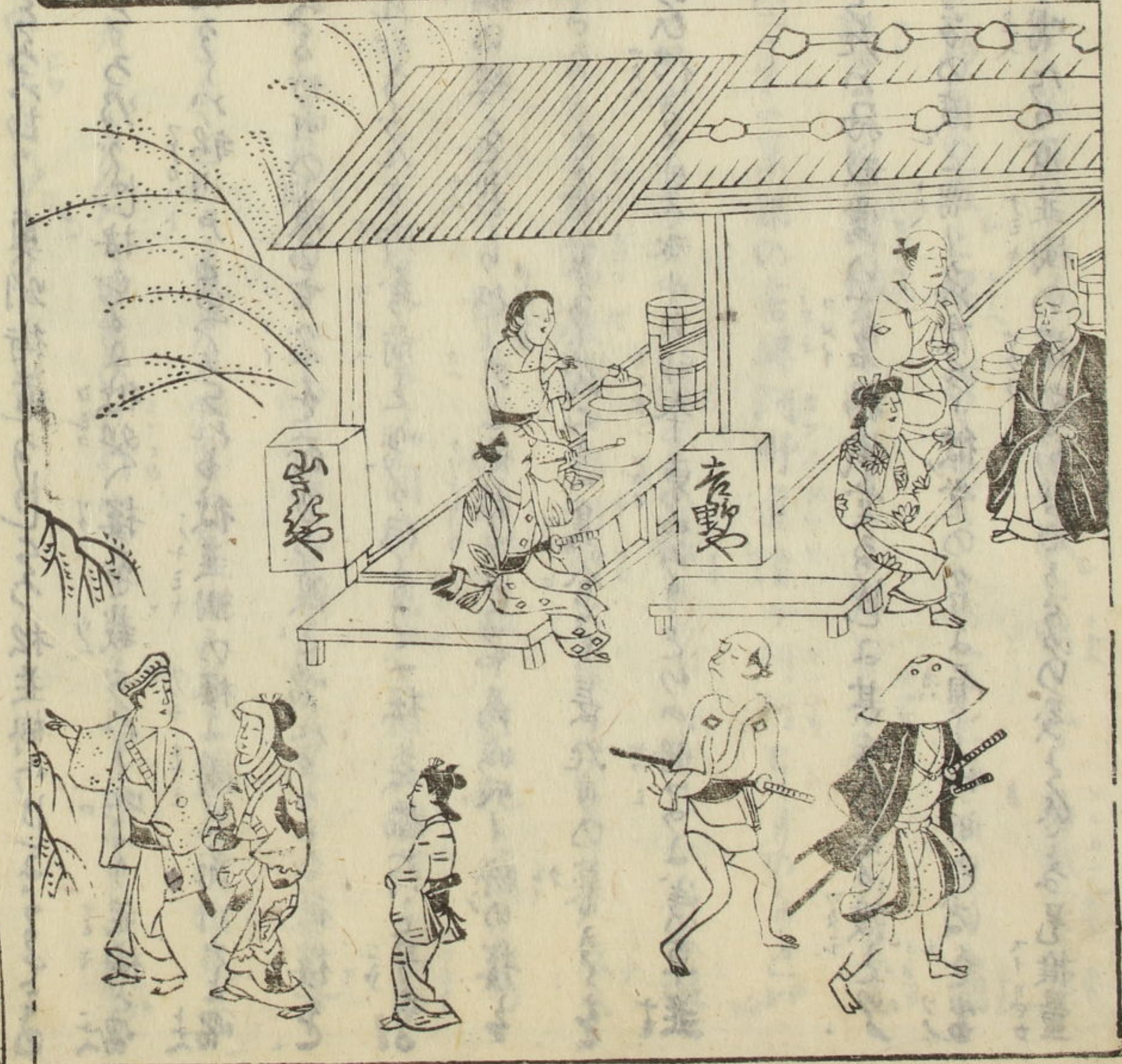
並樹の桜ありては渡るるゆゑもさうして花方の渡と唱へて物撰堂の  
 へ添へといふ事をうけて物方の友と唱へて種ふかきその堂を物方堂と唱  
 へて近曾ららの穴穿鑿まついと精細ある人ありといふは身銀屋一布一暮出  
 せ江戸名所記の寛文二年は京都の書肆河野道清が刊行せしりゆゑの事と  
 編者も画も京都の人とありらんといふは博覧の悟もあり大に名不世  
 傳者も画も京都の

記しと詳すとされども江戸名所記と同たう  
 出づりのありては物をりてをあらとあらが同書亀戸天神の園後高西  
 の郡亀井戸といふ名ありらうればさうべうらうは原ありては紫雲  
 樂寺の天神を勧請しとありとありて亀戸天神宮の寛永三年は菅原信祐建立  
 といふ事ありといふ考るといふ事ありと書の刊行寛永をよると遠かじと  
 物撰堂と記しとそその実をゆくとといふ

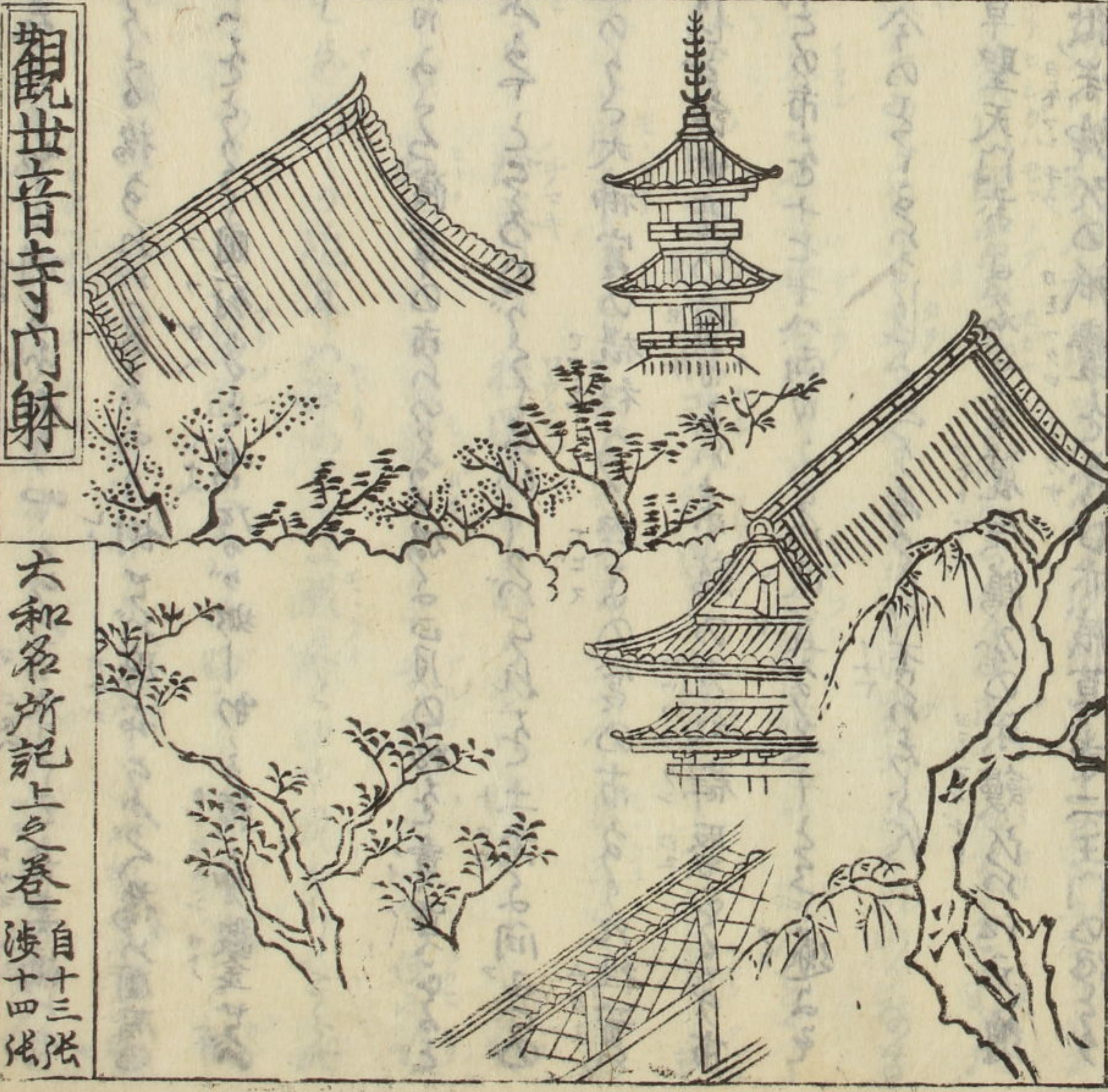
○今並木町と唱へるとうらへり奥羽街道より松並樹ありといふ事あり  
 是邊よりといふ説はうらへりかじ接ぎりは彼処へ桜を栽られといふは並樹と唱  
 たりといふ花川戸の中よりハ船川戸といふりられは彼並樹の桜は因て花川戸と唱  
 たりといふべし前より竹町の渡の古名を花方の渡と唱へるもさうして彼桜を  
 賞美するといふるはらん亦御前と唱へるはらんは桜木無輪高と号する  
 禿倉ありられは並樹の桜を栽られといふは勧請せしめたりといふは一件の桜を  
 當初世人の賞翫たりといふるもさうして春ありといふらんは集合する長元日の暮るるを  
 といふといふといふらんといふは實永中の印本東めぐりといふの冊子といふは浅草並  
 樹の桜のつらんといふ

或云子が説のいふは物撰堂の古名物撰堂といふ其方といふは渡といふ  
 といふといふは物方の渡と唱へるといふは彼堂の名を肩一竹町の渡を  
 物方の渡と唱へるは並樹の桜ありといふといふるの事といふは推量

●かきぬ海海山代  
 のまこととていゆふ  
 せとらるんくそい  
 かごやうかりきん  
 人の心もすまわら  
 ありては休林あん  
 ろうしてあゆむと  
 んとてあやむとけ  
 わさくさくうんせ  
 らねいげんわら  
 まのしませハニせ  
 らせいのりそん  
 あゆむとすまわ  
 るのせりくくけ  
 らもけいんそん  
 あさくさく川の流



より若のうはかま  
 りあげあへんぞ  
 のひうりそんあ  
 あふららんし  
 げあよあめあ  
 そあはあ親子  
 之松指現とよ  
 あめあなる  
 焼り池け寺に  
 ありた玉門の  
 ぶあけらあ  
 本堂乃そあ  
 計り  
 枝あ  
 いあ



觀世音寺門躰

大和名所記上之卷 自十三張 漫十四張

の疑う事信用まがうもの例もあやとりか予答り云、吾妻橋の巻  
舞神社のうしろなる橋まればらの名あり例ては麻布らうの橋の園府の  
わき流るとりかへをとりて園府と唱るが如くもの類、宝殿まが  
づいせりおあべー

○毎年十二月十七日十八日みづら浅草の市のみも、好ま月物を賣買する  
るに、お園まがうつらまがとらうぬがく、おひーづられを土老と問よ  
市のも初雷神門の左のうへ大神宮の横社ある、蛭子の宮の市ありは往昔  
十二月九日十日両日ありしが、親世帝の曾日あり、赤松の老幼群聚するは市  
のりよりなりなりと、この市を十七十八両日とせ、便直るべしと、遂にそ  
のふきをまがへり、今のことまらぬし、と、まらぬるは、否はあべ

○徳宝天和のころ浅草聖天門におまごるる、麓屋鶴の米、鰻、ひに戸、徳  
麩子、萩、り、一友人、彼、米、鰻、の、紙、囊、を、おび、赤、浅、草、寺、二、王、門、の、へ、と

る、さ、の、茶、屋、の、圖、鏡、に、大、和、名、所、鑑、よ、ん、え、た、る、因、よ、と、其、出、せ、り、の、ま  
へ、の、圖、を、つ、と、云、賞、菱、川、師、宜、が、画、る、り、の、を、つ、と、武、士、編、笠、を、載、り、た  
長、尾、両、刀、を、帶、高、股、を、あ、ら、り、と、ま、ら、も、又、その、圖、あり、れ、り、ら、る  
故、と、や、と、い、ま、ら、予、答、り、不、及、坐、右、あり、り、昔、物、語、を、か、け、扱、れ、と、ら、  
示、せ、が、その、人、忽、煮、炊、ぬ、昔、物、語、云、往、昔、の、往、還、と、る、侍、衆、上、下、を、着、一、或  
は、袴、を、と、る、者、た、ら、も、大、く、股、を、と、り、と、ある、り、と、馬、上、の、人、も、股、を、と、り、と、馬、  
騎、たり、り、た、の、二、尺、も、拭、ら、り、一、本、往、還、と、る、ゆ、あり、今、の、往、還、と、る、ゆ、あり、行  
人、り、下、く、も、侍、供、と、ら、り、一、本、獨、ある、く、時、も、股、を、と、り、と、歩、行、中、間、へ、使、使、の、  
み、も、尻、高、く、し、り、と、り、と、お、ま、り、か、近、年、の、獨、ある、く、股、を、と、り、と、尻、中、間、へ、  
圖書、上、卷、云、女、の、お、ま、ら、り、と、お、ま、ら、り、と、お、ま、ら、り、と、お、ま、ら、り、と、お、ま、ら、り、と、  
ま、ら、り、と、お、ま、ら、り、と、お、ま、ら、り、と、お、ま、ら、り、と、お、ま、ら、り、と、お、ま、ら、り、と、  
の、以、松、坂、と、り、と、お、ま、ら、り、と、お、ま、ら、り、と、お、ま、ら、り、と、お、ま、ら、り、と、お、ま、ら、り、と、

貞享の以り編笠以才止る皆一同の菅笠云々の云々  
其の時勢雜あり

七 地名の訛謬

東鑑云。建長三年三月六日。武藏國法草寺。如牛者  
忽然出現。奔走于寺。于時寺僧五十口。許食堂之。而  
集會也。見件之怪異。廿四人。立所受病。進退不成。最  
風。七人即座死。由亭子云々の後。世好十事者。多飾の牛嶋  
ハ他、牛の物。妙く水。と云々の牽強附會の誤り。此の如き牛  
御前の神社を。一御の鎮守とする。牛嶋と留る。人々。いふに  
毛蟲の牛。いふ。大人の。義。を。と。る。の。東鑑。と。り。出。す。る。誤。を  
いふ。と。も。牛。御前。牛。天神。の。牛。の。昔。ま。ま。大人。御前。大人。天神。あり。と  
右人も考あられり。

江戸破子の説も亦純まうり築土の神のまごらか産砂まうりまをい子孫

考一篇を著さるやととくも事長りればら又贅せん築土を御前の袖  
是ことよりいふらるるわ。道灌の清和源氏之佐入道頼政卿の藩之且その主  
なる扇谷定正卿ハ藤原姓をあらは平氏なる御前のをありて城隍廟と  
とらざるもあらざらば例に神田明神のまご御前の天の孫とあらはるの如

本御前の圓山といふ妙の古名家深まるといふ之豊嶋平源家深の後のま

一様まうりつらるるをいふの鎌倉大草紙をいふもまうり今物述のありて平  
深明神のり但家深といふこと。旧跡をあらは大塚の廻國雜記よりええ  
今その地名を存せらればあらう今のかまの圓塚まうりま。馬を更ぬ  
あるまうりま海たがぬ。

八 四時代謝

百年前のまうりまに碑まうりまのま。維り眼前まうりま。鏡りのまうりま。我の推量









是の本郷なる大根畠と云ふ処の商人が靴の室よりとらへたりと云ふ事あり  
五月の頃三崎は角なる竹の子生たりと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
本境所なる動休が芝居いとめづりたる事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
のありたり竹のりららみたりと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
弥大入り洲の人の癖あるべし彼角なる竹の子のりららみたりと云ふ事あり  
とらぬと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
農夫某甲が圃は生たりと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
涼寺の釋迦如來は天明五年の夏亦享和元年の夏と云ふ事あり  
かゝる由は善光寺の阿弥陀如來は享和二年の夏法草寺よりかゝる由  
ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
も年代記と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
るありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり

事か抱かほえり天明年間より北門谷なる執金剛神ニ王と云ふ事あり  
の從屬ありと云ふ事あり甲子の年法草なるを郎稱符へありぬ人もありたりと云ふ事あり  
と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
人ノ競ひて弄れ法間山のやと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
月ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
間と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
ある朝熊山も熊を假字ゆへ隈たり亦筑前も本綿間山ありと云ふ事あり  
も夕隈の義ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
阿も和訓久未なり又余雅は凡山遠望之則翠近之則  
衛微故云翠微と云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり  
べと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事あり



Handwritten text in cursive style, located above the illustration.

Handwritten text in cursive style, located above the illustration.

Handwritten text in cursive style, located above the illustration.

Handwritten text in cursive style, located above the illustration.

Handwritten text in cursive style, located above the illustration.

Handwritten text in cursive style, located above the illustration.

Handwritten text in cursive style, located above the illustration.

以右為上

Main body of handwritten text in cursive style on the right page.

Vertical handwritten text on the right page, likely a commentary or explanation.



# 細工物目録

## 細工物室物目録

此の巻は、細工物室の目録に、  
山崎屋、古澤屋、松屋、  
右目録の所記の如く、  
各店名を記し、春、常、  
各店名を記し、春、常、

### 三尊佛

善哉佛  
天衣佛  
喜波吸地碗



四天王  
四天王の  
喜波吸地碗

### 不動明王

不動明王の  
新八世の  
喜波吸地碗

### 役行者

役行者の  
喜波吸地碗

### 目連の修徳

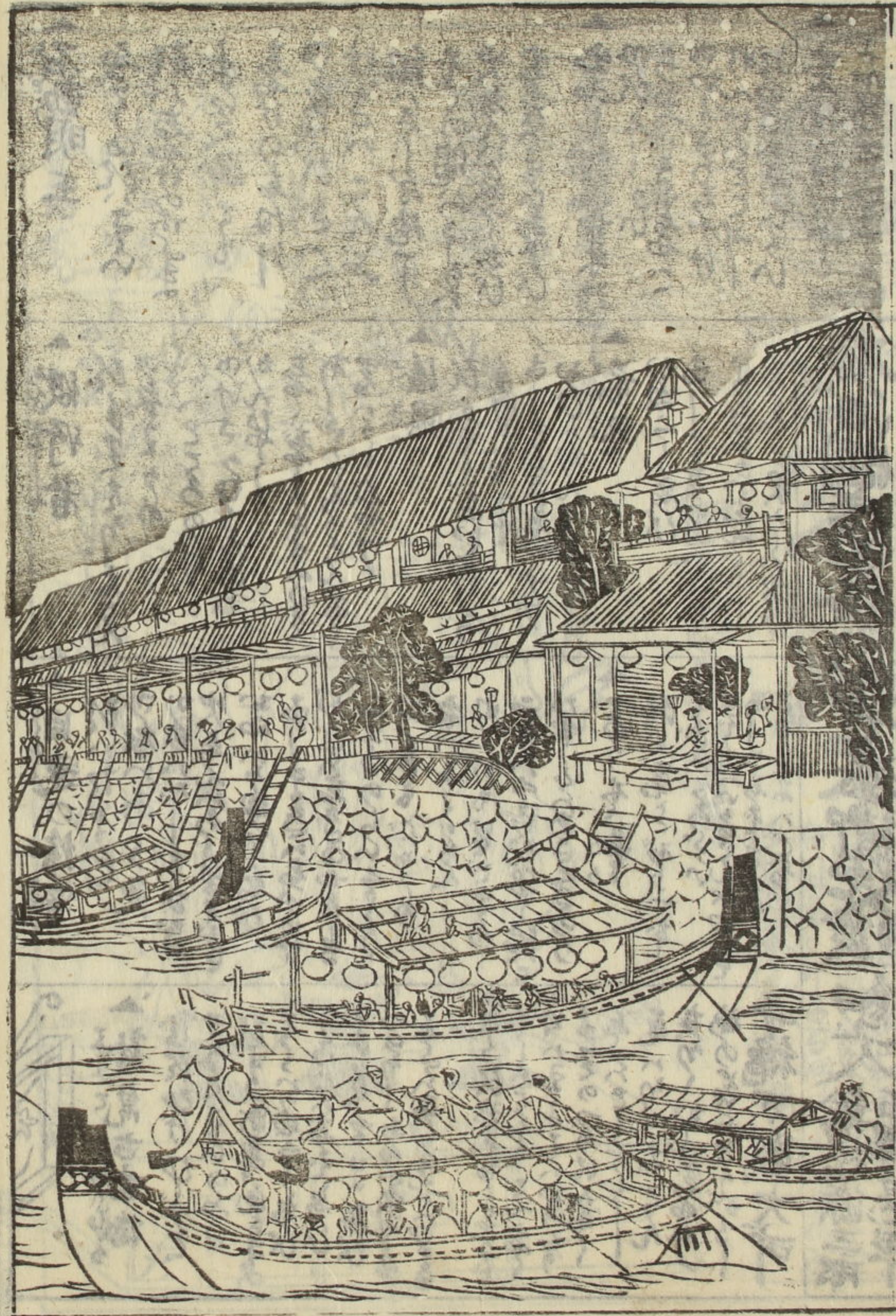
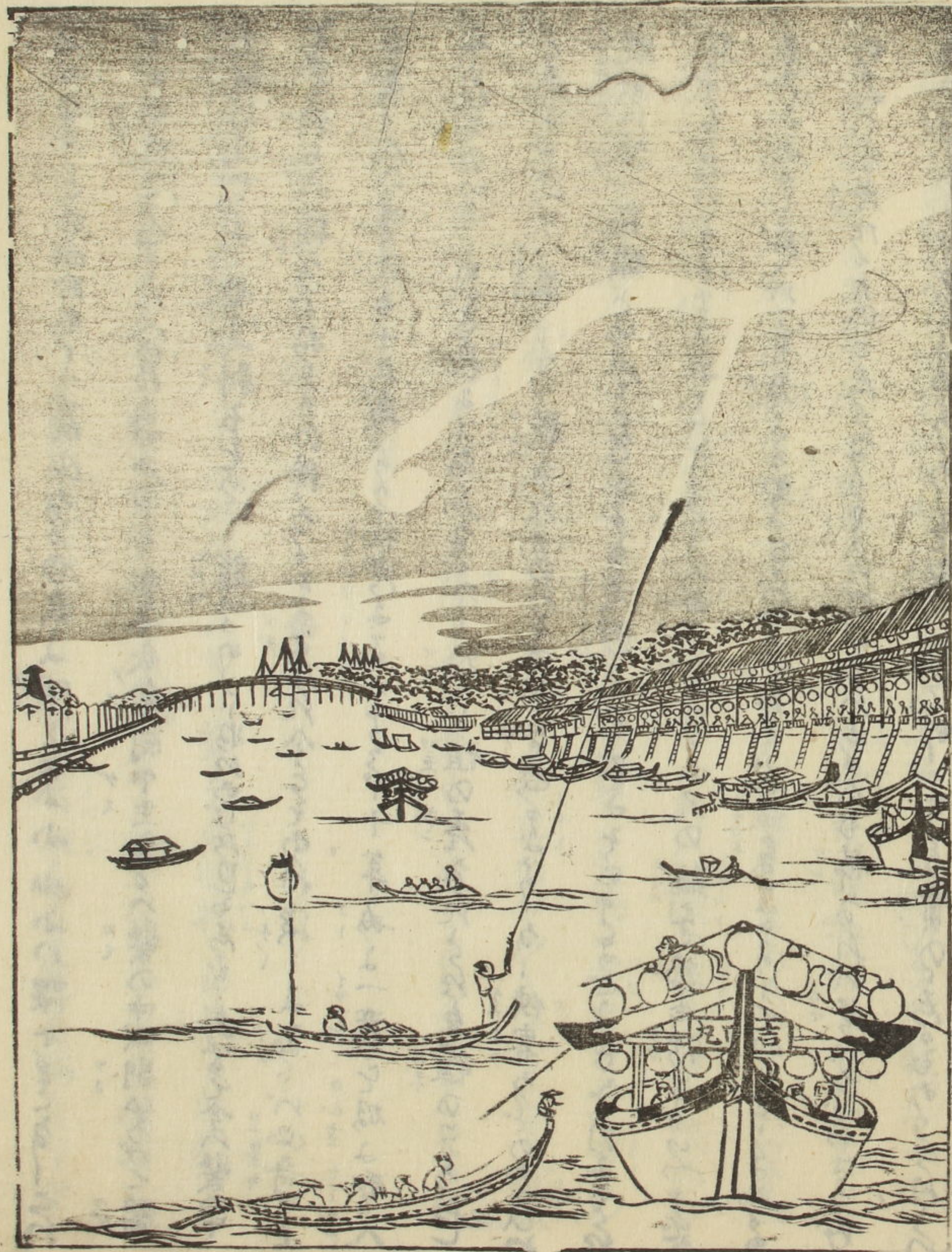
目連の修徳の  
喜波吸地碗

### 勢虎古本梅

勢虎古本梅の  
喜波吸地碗

## 安永七年戊戌六月出

細工  
古澤甚平



浮繪 東都中洲夕涼之景

北尾政美画板元魚油町

鶴屋喜右衛門  
葛屋重三郎



本松井町マナイト今組板橋トナラと唱ナラの本名新橋シンカシと唱ナラ昔よりそれを組板橋トナラと唱ナラ 四葉の橋ヨフツノハシ  
なるに絶トケする一葉マコモが洲フチとの彼新橋シンカシの南の岸キレをあるに今イマの此の  
たるの人を忘トナハラスたその名をあるの稀キレなり亦世の南北の盡キリトメ知チ堪タカ留ルと  
唱ナラの此の小川の吹フクえりられたる石橋を蟬橋セミハシと唱ナラれどその名をある  
る月の吹フクえり今更イマの本校と唱ナラの舊名万平坂あるが古老コウラウより寛永  
中の地界チツを接マナヤするに所家マナヤの今九坂イクサカ坂と唱ナラの此のありんたらに町家を後  
水築地ツギキチと唱ナラたえて水坂ミヅサカ田所築地ツギキチ飯田町イヘダノチと唱ナラれし九坂イクサカ坂のこの寛永の  
ら飯田イヘダノチと唱ナラたりこの飯田イヘダノチの地をわたりある町家をわたり飯田イヘダノチといふ  
る慶長年間飯田某甲用イヘダノチ發ツクり土俗の碑イソクに傳ツクふ是シ不レ知レんといふ  
りあるといふべしけりナリハレしるるは活業ナリハレする程の役トモナラれなきも化アチはとも  
あるべくいふもつと慎ツシメまるゝ翁馬オウバの穴アナとありと朝アサに夜ヨに花ハナいとあり  
なるにべしハツカけ僅ワカく四五町イヘダノチの地は土俗イソクの謬ヒヨウデン傳ツクりけりいふにその  
ことよりのも奇書キニミ珍メ藉シのゆゑは倦イタシ中ナカ途チより廢ハイたるもあはれなり  
るゆゑは江戸名不ス記ス江戸蕉シヤウ鹿カ子コ江戸咄オウホ大オホりこの鹿カ漏ルりや十トウが  
二三ニを志シす足タはきり當時トキ印行イハヒの地圖ヂより明曆メイリキ前後ゼンゴのりの穴アナ究キウめては  
かに延宝エンホ四年ヨンネンの印本イハヒ江戸總ソウ鹿カ子コ載ノる菓子所ウシヤの部ブ飯田イヘダノチ向ムカ虎ク屋ヤ  
柳屋ヤナギヤ壺屋ハチヤありと唱ナラる菓子店ウシヤ今イマより生藥キヤクシ舗ヤあり折マをと  
りつものれどその蹟アトありと彼壺屋ハチヤの暖簾ノカシ延宝エンホ年間コゴ約ヤク也ヤ吉キチ祥シャウ寺ジ  
より副司フジシを勤ツメたりける高甫コウホ和尙オセウの筆ヒツよりとるいふに假名カナより横ヨコ上ウヘ  
つかやと書カキて件キヤンの高甫コウホ和尙オセウ飯田町中坂イヘダノチナカサカある松屋マツヤ權ケン九ク嶋シマといふ深坊フカモクの  
先祖センソ今の權ケン左サ門モンより五代イハハチ前ゼンある權ケン左サ門モンの伯父オウヂより今の所シヨ縁エンよりして同  
町チヨウより追オシ郡クニあり壺屋ハチヤの暖簾ノカシ松屋マツヤより頼タノとやえり高甫コウホ和尙オセウより  
書カキるに今よりその形カタをみし深フシムるより彼松カ權ケンの老オシ店タナある白ハク養ヤウ隱イン居キなり  
又高甫コウホ和尙オセウを八百屋ハチヤか七シチが蹟アトの跡アトありといふ説セツありと今イマの會カイより

本松井町マナイト今組板橋トナラと唱ナラの本名新橋シンカシと唱ナラ昔よりそれを組板橋トナラと唱ナラ 四葉の橋ヨフツノハシ  
なるに絶トケする一葉マコモが洲フチとの彼新橋シンカシの南の岸キレをあるに今イマの此の  
たるの人を忘トナハラスたその名をあるの稀キレなり亦世の南北の盡キリトメ知チ堪タカ留ルと  
唱ナラの此の小川の吹フクえりられたる石橋を蟬橋セミハシと唱ナラれどその名をある  
る月の吹フクえり今更イマの本校と唱ナラの舊名万平坂あるが古老コウラウより寛永  
中の地界チツを接マナヤするに所家マナヤの今九坂イクサカ坂と唱ナラの此のありんたらに町家を後  
水築地ツギキチと唱ナラたえて水坂ミヅサカ田所築地ツギキチ飯田町イヘダノチと唱ナラれし九坂イクサカ坂のこの寛永の  
ら飯田イヘダノチと唱ナラたりこの飯田イヘダノチの地をわたりある町家をわたり飯田イヘダノチといふ  
る慶長年間飯田某甲用イヘダノチ發ツクり土俗の碑イソクに傳ツクふ是シ不レ知レんといふ  
りあるといふべしけりナリハレしるるは活業ナリハレする程の役トモナラれなきも化アチはとも  
あるべくいふもつと慎ツシメまるゝ翁馬オウバの穴アナとありと朝アサに夜ヨに花ハナいとあり  
なるにべしハツカけ僅ワカく四五町イヘダノチの地は土俗イソクの謬ヒヨウデン傳ツクりけりいふにその  
ことよりのも奇書キニミ珍メ藉シのゆゑは倦イタシ中ナカ途チより廢ハイたるもあはれなり  
るゆゑは江戸名不ス記ス江戸蕉シヤウ鹿カ子コ江戸咄オウホ大オホりこの鹿カ漏ルりや十トウが  
二三ニを志シす足タはきり當時トキ印行イハヒの地圖ヂより明曆メイリキ前後ゼンゴのりの穴アナ究キウめては  
かに延宝エンホ四年ヨンネンの印本イハヒ江戸總ソウ鹿カ子コ載ノる菓子所ウシヤの部ブ飯田イヘダノチ向ムカ虎ク屋ヤ  
柳屋ヤナギヤ壺屋ハチヤありと唱ナラる菓子店ウシヤ今イマより生藥キヤクシ舗ヤあり折マをと  
りつものれどその蹟アトありと彼壺屋ハチヤの暖簾ノカシ延宝エンホ年間コゴ約ヤク也ヤ吉キチ祥シャウ寺ジ  
より副司フジシを勤ツメたりける高甫コウホ和尙オセウの筆ヒツよりとるいふに假名カナより横ヨコ上ウヘ  
つかやと書カキて件キヤンの高甫コウホ和尙オセウ飯田町中坂イヘダノチナカサカある松屋マツヤ權ケン九ク嶋シマといふ深坊フカモクの  
先祖センソ今の權ケン左サ門モンより五代イハハチ前ゼンある權ケン左サ門モンの伯父オウヂより今の所シヨ縁エンよりして同  
町チヨウより追オシ郡クニあり壺屋ハチヤの暖簾ノカシ松屋マツヤより頼タノとやえり高甫コウホ和尙オセウより  
書カキるに今よりその形カタをみし深フシムるより彼松カ權ケンの老オシ店タナある白ハク養ヤウ隱イン居キなり  
又高甫コウホ和尙オセウを八百屋ハチヤか七シチが蹟アトの跡アトありといふ説セツありと今イマの會カイより



か七が菩提寺ハ小石川の南藤山圓葉寺ありは菩提寺ありとの説傳を  
受てての親をあらんとすとの事ありを向親老人の問よはるるに  
むと答たりん

羽よの服部子遷當唐山の飯類山を飯田町とすとの説傳の  
を推文とも地名を私に改入るる古実を稱定を蒙らるるは李太白の  
飯類山前逢杜甫云々の七絶あり人の志所なれば哉

○牛込駒込長祿長亨の池沼も入えたり往古牧の迹ありべし信濃あり  
難も牧の迹あり同黒月白月赤の往昔牧の駒を出しその名色よりして名  
らんと徂来録も既よりのより目黒の驪馬馬黒メジロ馬馬  
の假字に延喜式に載らるる武藏國駒寄の牧五所の牧亦兼平官符に  
八月十二日の秩父の牧廿八日の同小所の牧の駒馬貢之と云えたりとの外  
私に難なるる牧驛ありん煉馬も牧の馬を騎するなりなる所を浅草

馬道の昔士馬と唱へ北里の蝶客馬と唱へいりなるをんといひ  
らよりの牛込駒込と唱へり牛の駒ハ車牛の墮ちれば名とすといふる  
よや今由九坂坂の車とてくを禁らるる本所大町邊なる駒留石もとの縁  
故傳傳のよりのよの考正と追書と云へん

○落穂集といふ所の富澤町といふ所の富澤と書更らるるをいふる  
中の地界をいふる今富澤は河といふ所の尾張町といふ所の次徐直町今長  
谷川河と唱へられは落穂集の標をあらへ亦通油町と塩町の間にあり  
翠橋由寛永の地圖より今通油町なる南の隅より塩田なるあり  
すとの今の大傳河といふ所の通油町と今通油町の塩町よりいふる  
明曆丁酉の回祿後と云へる寺院を地知へ遷されし時所割ありはま  
ま今今といふにあらるべし

○あつけれ 御代の長久多る遣は物とて今大に戸は具足とていへり

あつれども昔より今ありの神田の初進能 明神の社也 護経座 天塚

耳垢取 弟を長官といふ神田辨所 獣の藝藝師 水戸の神と稱え陽徳天神 彼

衣あふ女子野呂間人取つゝ其を盤入取けりい山猫 あつれといひおとめと

なごり坊主太平記 街改より平 唄比五尼五月の萬葉入取賣扇の

池張賣奉書 紙をよき紙をよき さらん人々をさつらうらとて

坊主をいひいふ唄比五尼と扇賣ハ二三十年以前まゝありり千歳お後

の小比五尼とも男の改中を祀り腰を高くけり腰は柄杓を挿し

三四人を一隊とり老尼は半領せられ人々のいふまゝと靴の声もさうさ

唄のよ物をさうせされがめんといひて催役り昔の形をさうて唄い

りい今よ比尼師の名を送りつゝと地獄変相の圖を説き思婦を

後り熊野比五尼の流あるべし伊勢比五尼の自笑の愛敬昔男と

の冊子 オホキキ その巻を盡せり扇賣ハ地紙の形まゝ箱をさうて肩

う オホキキ 毎夏は巷路を歩む買んとりい人あればその好まは任し即坐は

を折す オホキキ 出れば只今二十以下の人のいふまゝをさうさるべり年のはり

常の建武の比既子絶たるが東のり オホキキ 常好が徒然草といれ

ご今の東まも俗子 オホキキ ありりもあつるぬ京の熱想又賞伊勢の

鶴入泉列場 オホキキ あり九月の雛祭も僅よその名を存するの近属は戸を

の画 オホキキ せんといひあつれり生活とあるりのありしり オホキキ 程ふと跡

あつり又猫の蚤ととんと オホキキ 歩むあつれり妻をを娘 オホキキ のも

まも オホキキ 遠れりあつる猫の蚤を オホキキ せんといひあつるその猫湯を

あつと オホキキ 濡らるも毛をひらる オホキキ 獣は畏れあつる猫の蚤 オホキキ のは

あつり オホキキ 夫といふとあれど オホキキ 猫と オホキキ 愛 オホキキ するの オホキキ あり

くへ行 オホキキ ると亦南京操といふ人 オホキキ 形 オホキキ の オホキキ あり

くへ行 オホキキ ると亦南京操といふ人 オホキキ 形 オホキキ の オホキキ あり

廣巷路の勾欄ニヤキもあつて狂言の一年中国姓爺の虎狩の辰コクセシマの辰トラガリとして又  
たこの世の程の絶えその跡今の軽業をどうするの昔精賣卒は賣  
麻賣まど子が知稚りじ比まの毎春二日してその鳴び声をきく  
あつて今が今も稀マレなるも夏日街改まると水一錠と一銭と賣見こ  
とらぬ程の比まのつらさを詳ツバラにどの江戸の外もあつた  
の大都會へ仰ぐ亦予がりのつらさを比まのあつて今盡サカリに行つて  
あつて綿繪の明和二年の以唐山の彩色摺サイシキスリなるを以て板本所金六の  
の版摺某甲を相語版本へ見當をたつて工夫してつらめて四五遍の  
彩色摺を製しおせしが程のつらさを摺物とつらめて金六も  
あつてこの和以あつた筆も彩色サイシキを丹画といふ又紅  
いふに今も至る江戸の綿繪その工を盡せるも絶え比まの  
あつて述属の紅毛の銅版チカコロといふも出米陸奥の會津人をも彼綿繪を  
撰メてとるれが世人既スチに眼熟メナレて奇キとて彼金六も文化元年七月身も  
あつた當初彩色摺といふものつらさを行つて時その美ビを綿ヒといふ  
世舉ヨコソクて綿繪の名を以て負オハけん何れも品類ヒンリイ多くありて賞シヨウクワンを  
由賞ユウシヨウとて人々世に稀ミレなるものを愛メテつとつらさ奇キとて誇ホコらんとつらさ  
亦紙煙草カミタバコといふもの予が知稚りじ比まの伊勢イセよりつらさのと下野シノの  
申津宮ウチノミヤよりつらさのつらさを人々賞シヨウクワンを以てつらさられもつらさ細サイクシに  
江戸エドの物と紙煙草カミタバコといふもの敵テキもつらさ至イタり亦看版書カンバンカキといふもの商人  
の店前ミゼマエの障子行燈シヨウジを張更ハリカエつた需モトメもつらさ数ス个字カジを題メつて予が  
弱年シヤウネンの比まのつらさもあつたつらさを便宜ヒンギの技ワザといふ  
あつても行つたつらさ亦挑チカつたつらさを賣ウリつたつらさ十年コノカタ以来チカのつらさ挑チカ  
綱ツナの綱ツナを着ツクつたつらさ正保年コノコ向ヨり起タつると武家故事ブケコト要略ヨウリヤクといふつらさ磁器セキモノ  
の焼セキモノつらさとつらさ巷路ニヤキを糶ヒリつたつらさも廿年コノカタ以来チカのつらさ継ツギつらさといふもの

無題

きく冠たりしははき便利なり大なり婦女子の髪を結ぶるに由り  
幼稚は此の小改髪をいふ根をいふなり髪と鬘をいふなり鬘入と

髪入の髪をいふなり鬘を長くいふなり今のごく鬘挿といふなり  
その後髪の結ぶ由大なり髪より少なり老女も髪と鬘をいふなり紙張

る鬘の形はさるるの鬘の形はさるる物をいふなり市中の女子の前髪を短く  
し刷毛の如く上へいふなりあつてあつていふなり衣裳の袖口あつて東

ついでいふなり寛永年間より良銭をいふなりいふなりそれ由明和年間  
いふなり袖口をさくしさくし拵りたるなり今も綿をいふなり拵ることを

いふなり吹草といふなり由寛文年間よりいふなり今も緑三年七月は  
あつて人倫訓業園果といふなり鶺鴒の落りけり火吹竹といふなり吹

くきり親世紙といふなり又三郎といふなりと西鶴が男色大鑑といふなり

いふ物もびりの入るなり紙を焼くなりいふなり縮紙檀紙も  
平入の用いふなり伊豆の後善寺紙といふなり紙も又いふなり

貴由紙も陸奥紙といふなり用いふなり物といふなりいふなり  
いふなりいふなりいふなりいふなりいふなりいふなりいふなり

いふ漏れも懸あつたり  
⑩ いふ長篠

東海越え細い竹の子をいふなりいふなりいふなりいふなりいふなり  
いふなりいふなりいふなりいふなりいふなりいふなりいふなり

いふなりいふなりいふなりいふなりいふなりいふなりいふなり  
いふなりいふなりいふなりいふなりいふなりいふなりいふなり

いふなりいふなりいふなりいふなりいふなりいふなりいふなり  
いふなりいふなりいふなりいふなりいふなりいふなりいふなり

いふなりいふなりいふなりいふなりいふなりいふなりいふなり  
いふなりいふなりいふなりいふなりいふなりいふなりいふなり

とらふゆゑにさうもていふことゝの意をわたくしはわたくしとていふことゝはわたくしとて

のうらひをいふことゝの意をわたくしはわたくしとていふことゝはわたくしとて

走鳥二紀名之一云依依依依依 細細竹也とり細小と熟く細く又小り

用小竹二字謂之依依一 竹の初生也とあらば首の初生也

同書又余雅の法を引く首 竹の初生也とあらば首の初生也

さらに後すすの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也

あらははの意も竹の初生也の意も竹の初生也











不<sup>レ</sup>如<sup>レ</sup>識<sup>一</sup>丁<sup>一</sup>字<sup>一</sup>出處考<sup>レ</sup>之<sup>一</sup>乃<sup>一</sup>个<sup>一</sup>字<sup>一</sup>非<sup>一</sup>丁<sup>一</sup>字<sup>一</sup>按續世說  
 書<sup>一</sup>此<sup>一</sup>个<sup>一</sup>字<sup>一</sup>蓋<sup>一</sup>个<sup>一</sup>與<sup>一</sup>丁<sup>一</sup>相<sup>一</sup>全<sup>一</sup>傳<sup>一</sup>寫<sup>一</sup>誤<sup>一</sup>焉<sup>一</sup>後<sup>一</sup>又<sup>一</sup>觀<sup>一</sup>張<sup>一</sup>翠<sup>一</sup>微<sup>一</sup>  
 考<sup>一</sup>異<sup>一</sup>亦<sup>一</sup>謂<sup>一</sup>个<sup>一</sup>字<sup>一</sup>乃<sup>一</sup>知<sup>一</sup>世<sup>一</sup>說<sup>一</sup>之<sup>一</sup>言<sup>一</sup>為<sup>一</sup>信<sup>一</sup>又<sup>一</sup>觀<sup>一</sup>蜀<sup>一</sup>志<sup>一</sup>南<sup>一</sup>史<sup>一</sup>  
 皆<sup>一</sup>有<sup>一</sup>所<sup>一</sup>識<sup>一</sup>不<sup>一</sup>過<sup>一</sup>十<sup>一</sup>字<sup>一</sup>之<sup>一</sup>結<sup>一</sup>世<sup>一</sup>通<sup>一</sup>謂<sup>一</sup>王<sup>一</sup>平<sup>一</sup>所<sup>一</sup>識<sup>一</sup>僅<sup>一</sup>通<sup>一</sup>十<sup>一</sup>  
 字<sup>一</sup>恐<sup>一</sup>是<sup>一</sup>十<sup>一</sup>字<sup>一</sup>亦<sup>一</sup>味<sup>一</sup>可<sup>一</sup>知<sup>一</sup>十<sup>一</sup>與<sup>一</sup>丁<sup>一</sup>字<sup>一</sup>又<sup>一</sup>相<sup>一</sup>似<sup>一</sup>其<sup>一</sup>文<sup>一</sup>亦<sup>一</sup>有<sup>一</sup>  
 據<sup>一</sup>也<sup>一</sup>與<sup>一</sup>淮<sup>一</sup>南<sup>一</sup>子<sup>一</sup>言<sup>一</sup>宋<sup>一</sup>景<sup>一</sup>公<sup>一</sup>熒<sup>一</sup>惑<sup>一</sup>徒<sup>一</sup>三<sup>一</sup>舍<sup>一</sup>之<sup>一</sup>謬<sup>一</sup>同<sup>一</sup>史<sup>一</sup>記<sup>一</sup>  
 謂<sup>一</sup>二<sup>一</sup>度<sup>一</sup>俗考  
 由亭子云書を觀ると難くもあるれ一畫一息を認らざるといふも  
 通<sup>一</sup>易<sup>一</sup>況<sup>一</sup>今<sup>一</sup>を<sup>一</sup>悟<sup>一</sup>了<sup>一</sup>と<sup>一</sup>或<sup>一</sup>十<sup>一</sup>と<sup>一</sup>久<sup>一</sup>あ<sup>一</sup>る<sup>一</sup>も<sup>一</sup>學<sup>一</sup>者<sup>一</sup>終<sup>一</sup>に<sup>一</sup>悟<sup>一</sup>ら<sup>一</sup>ず<sup>一</sup>  
 られを受續するその名もよく遠く今の學者の只文字を識るを要とい  
 うれどもその文字を知らず識易かざるものなり  
 ○唐蕭昺不識字常以伏臘為伏臘又一日張九齡送

字<sup>一</sup>刺<sup>一</sup>稱<sup>一</sup>蹲<sup>一</sup>鴟<sup>一</sup>蕭<sup>一</sup>以<sup>一</sup>為<sup>一</sup>鴟<sup>一</sup>鴟<sup>一</sup>答<sup>一</sup>云<sup>一</sup>損<sup>一</sup>芋<sup>一</sup>拜<sup>一</sup>嘉<sup>一</sup>惟<sup>一</sup>蹲<sup>一</sup>鴟<sup>一</sup>跌<sup>一</sup>  
 坐<sup>一</sup>耳<sup>一</sup>僕<sup>一</sup>家<sup>一</sup>多<sup>一</sup>性<sup>一</sup>亦<sup>一</sup>不<sup>一</sup>願<sup>一</sup>見<sup>一</sup>此<sup>一</sup>惡<sup>一</sup>鳥<sup>一</sup>也<sup>一</sup>九<sup>一</sup>齡<sup>一</sup>得<sup>一</sup>書<sup>一</sup>大<sup>一</sup>笑<sup>一</sup>  
 事物異名羊<sup>一</sup>曲亭子云唐山の文華の酒なりあれども每筆又盲者の  
 事<sup>一</sup>鴟<sup>一</sup>音<sup>一</sup>在<sup>一</sup>蕭<sup>一</sup>水滸傳又載する所の魯知深李達亦絶く一字を識らば原は寓言と  
 いふもその俗をあらはし足るなり 天朝靖治らば百年村落山野も又文章  
 といふも實は是れ早卒の餘澤なり  
 ○今児女輩書を觀ることを好めりあれども四字をその傍に施されば  
 遂に好讀と刊行の書籍ハ書肆只利の心をもてせりしやとて傍刻を  
 するなりと閱者只傍刻のを觀る本支を辨せ放し讀み隨てその字件  
 を忘るる生涯文義を悟らざるなら傍刻を刪去とて好讀といふ  
 を辨せれば文章を解に至らば古人文字を取らざる文を作らぬの己事  
 づらざる文章は和漢の差別ありわらざるもあらず漢もあらずるの

字を考へて備刻を絶せざるべからざれば雅俗ともよまれを疑はる一  
音ハ漢字より考へたるものありと中葉より音訓を考へて留めたる  
漢混雜の文よあらざれば俗字の解し易らざれば文一変して和漢を  
合せざるべからざるなり

○近属醫師のまづ本草は考ふるものありり患者禁好物を録し  
人を遣へしむるを向ふそのうちハ鯨あり河豚の和訓をフクと  
俗人音を借りて鯨と作る醫師これを考へて録しアビと考へしむる  
行せり患者詭びて考へて河豚を食ふ行ふその夜暴死せりといふ  
俗人の鯨の河豚あるを考へて鯨の石決明ありと考へて鯨の  
石決明ありと考へて俗の河豚あるを悟らんと考へて鯨の  
雅俗あるを考へて人殺さず河豚を考へて醫と考へて世人の  
類のと考へて

按本草綱目介之二云石決明釋名九孔螺華殼  
名千里光時珍曰決明千里光以功名也九孔螺  
以形名也集解弘景曰俗云是紫貝人皆水漬  
取頗明又云是鯨魚甲附石生大者如手明燿五  
色内亦含珠茶曰此是鯨魚甲也附石生形如蛤  
惟一片無一對七孔者良今俗用紫貝全非云云  
鮑云鯨四聲字苑云鯨音抱和崔禹錫食經云石決  
明亦立雜俎云鯨音撲今人統為鮑非也韻  
譜云一名石決明一殼如釜黏石上陶中有一但  
差小耳又乃彙集延喜式亦云鯨作石決明今俗鯨を  
統不具河豚魚は當りぬその統最甚一

○今の生薬舗皂角刺を讀み皂角刺と云へれ皂角子と同音ある故に

混せざるんば俗子の用心ありけり俗なり

○林卷設苑は灸一灼を一壯と云ふ壯年の人より灸灼と定めたるを

壯と云ふなり

沈存中が筆談より云へたりと云ふ思按ぶる所の疑非るん壯の壯と同音

あり正字通は熨馬註音壯火貌熏蒸也今炊粉資謂之

熨馬一説陸佃曰醫用灸一灼謂之壯俗因作熨

熨馬謂之壯亦方書之往灸灸壯は作るを云ふなり

の壯を象するなり壯壯とも熏蒸の義あり

灸灸と云ふを云ふ灸一壯の壯は壯年を當るなり

灸灸と云ふを云ふ灸一壯の壯は壯年を當るなり

灸灸と云ふを云ふ灸一壯の壯は壯年を當るなり

○素の親の首は有り甘の喜の首は有り他の首は有り

夙の鳳の首は有り福の麗の首は有り小刺金石録全傳より云へたり

唐山の俗有秋録より云へたり

○裁俗燈花の子を結ぶりのを云ふ丁子頭と云ふ接ぶるなり

五雜俎云國方言以燈為丁每添一燈則俗謂之添丁

又書言故事生子自云添丁唐盧仝生子名添丁欲為

個特役也韓文公寄盧仝詩末載生兒名添丁云

添丁の民丁の丁は五雜俎より添丁と同なり

新令男女十八歳以上丁以後課役云云と云ふ

裁俗燈花を税する丁子と云ふ是則唐山の俗燈花を税する

裁俗燈花を税する丁子と云ふ是則唐山の俗燈花を税する

廬江王夫人嘗燈花石一篇を著りての略あり





つるる

○仙と俗との字體相近し仙の人の山より俗の人の谷より人愚るを  
ふれは直を彼より至る人慳るを其の富を致す由あり仙の山林を  
栖りて常に紫極を慕ひ俗の色府を在り山林の口氣を離るる蒼顔字  
を為るる固は故あり

○山居する人の命長し海濱の人のちる人放りつるとりれ山中の魚肉を  
色しく常蔬食し或の本実草實を糧り其野を折炭を燒り干腸  
乃險阻を上下とこをめぐり體らく躬とくよりり且その居とる  
都會は遠る也名は悠寡しをめぐり命長し仙の人は從ひ山は從ふ亦  
是故あり海濱の人の魚肉は富るその飲食都會の人は異るる加え  
船は棹楫を操り波上を往來し一步も運りて却風濤は揺らこの  
舟は體ありしと脚胃を損じその漁獲を生計とるるをめぐり其悠心也

人慾多れば壽も短く人死日強又作没没の氷は後ひんは後ひんは兵  
亦以のるる

○學問の道の文字の向は置て其身を修行を慎みあり禪宗の不立文字  
見性成仏と鏡しもその美ありしとれども後人先聖の教を受てその言  
を聽その行を學んしとるる文字はよらざればいふともとへり項羽不學  
書ハ姓名を識し是とらるる項羽しその可なり強林足は覇はらと  
英雄人を欺くとらん狄秦の儒を忌とてこれを坑り書を燔く民を愚  
まんとやり惑るる項王高祖の儒はあはれその大業をさめりて天は  
く徳ありいづを文字よめんとや

○書画ハ文学の餘韻を人書画をさるるもまの暗りれば雅致風韻あり  
字をあらわしとるるを寫し圖はさるる繪を画くもの楫ありて教を  
形を鑣るるし馬に乗る如らん

世をめぐり児孫は亦くもの悔多うらんりぢりし思ひ公由効るるはらひを  
うらみに至る智老由解はる塵を解くぞの智老の思ひくくその思ひを

○

*[Faint, mostly illegible handwritten text in a cursive style, possibly representing a list or a long letter.]*

養石雜志卷之三



